早詞

是ハ諸國一見乃僧にて候我
いまだ陸奥そと乃濱を見ず候ほど
に此たび思ひ立ちそと乃濱一見と志し候
さてはミよき序なれは
立山禪定申さはやとなく急ぐ
程に立山に着きて候ふ　是ハ一一
一見せはやと思ひ候　さても

まつ此立山にきてみればぎやうさ
あらわかな地獄の有様ぞくも
をそれぬ人のこゝろは鬼神よりわ
なほおそろしや山路よりりに
ちもくこなる事ハおかしく見え鬼形の
涙路をと涙も更にとゞめえハ
慙愧乃心時至て山下にさうらふ

かゝることをきく
〽（上詞）なかくあまた迷
清僧よりへ議事なれ
〽（上詞）此方の
るまゝには何事まゝる
〽（上哥）陸奥へ下りしにさても渡りや
庵しつくの浜なるはまうし
まいらんひしもおはぐさの紋あ
下なるてんぐの妻やこの前を

御れ人てづれよし蓑笠を向て
くれよと候へ　早詞　是ハ思ひも
よらぬ事を候物かなさりとも迄
卜へつきすハ安き程乃御事なれ共
せおなしうづえふ定よりて己
やよりはあるへく　シテ詞　実に
う所る語なくてかひあるまし

思ひ出よわかみしより我がみ乃涙
時まて此尉かきそ乃麻きぬ乃
袖をときて　是をしるしに
涙をそへて旅衣　立ふあま
遊く書あとを雲や烟乃立山の
下
こうめもゝゆ春きゝとも借え
奥へなをよ秋なごりハなく〳〵

下 みなくわて あそふさへしはよ
らわく ツレサシ きつゝやもしよわも
さためなき世のならひそと思ひ
那のしゝ小梅の下乃世おあこゝり
繁まし道の末乃あらさ
また道のさこと人ぞうれしくなふ
悲しみの母りおりひをいまを母

ワキ詞
いつも小栗丹中はりも ツレ 旅を
やつかれ ワキ 是ハ諸国一見乃
僧にて候ひしが立山禅定申所よ
ぞれさまはてましけるはかなき人
陸奥へくだらは言傳申へし
ぞ此乃浦にて猟師の前をしりて
ぞうらなる蓑笠を向て給り候へと

ゆへ義曲から新しき姫よう気にて
そうしろ姿やりし御覧引な
へき比中てうへゑあさの衣乃
袖をとふてたまちわてそ姫は
是まへおて参わてはだか一思召
寄ちけるきとのんり 下ワキ 挟え
遊あうや浅緑や四手乃田長の

詞

な義人のゞんきてあへぬ涙か
去所のしあまさまんにことなぬ 上ゲハル
はきとなまはづをやあさこゑんを 一ハル
ワ人乃代衣下と我よをまはる藤袴 下ゲ
はも久しき形見ありし 上ゲ
扇出しくみまは拠ひも ワキ 上ゲハル
かたくたきふ乃徳れゞく 一ハル 一生

なれどもありしまぼろてあつき
にはろあくなふりしの形見や
やがの元まとひのばはなを
りきとしひくの中ふ亡者の
のうせまなみ此笠をさゝう手向
巻数〱

ワキ下　南無幽霊出離生死
頓証菩提

後シテ下　陸奥乃そとのはま
なるよふことり鳴くなる声は
うとうやすかた　一見卒都婆
永離三悪さばも母乃ゝしゝくは
だとひ孫しやたわせがごとく
三悪をとはのりは包しじいふ
みりむや法力乃為造立供養よ
あはれし〱世をやばけ筆大ろ峯

あわれげに見る知火中は淵ぬ庵し
篷艘大篷艘あわとも浮水中は
うたしずかなりし比翁おもき
罷維のんびり波の底にのこる
ざる歎をこほしく旅罷ゆ夢露
恵はるか月小宿りし行く法僧
江い陸奥のぐずくは海の底

松原乃だしほえふまし塩焼き乃
求めしかぬうり里乃艶か浦の
笹屋形ばかりふりしぼりとまりりし
まろ月のためわかれと乃浪心
あまりは床の底かく　あまきえ
ともりし君さ世や消な舞と
下
親子手にをみせとへ重ねふゞ所く

ちりわなは有様か　影やくるは
いりしへみさしも替まし妻や
子もぞぬうしうおのまなきて
屋ひのさの為乃やひうしいや
だなましまこえりんげうるお
りはふむちらなえりきつぶ
難もあらめはぢるとうり

鬢をしよなてゝあかなはうし
やはりむとはまを　様陵の
なも花簾り出し屋ふくぞとき
見えし姫小松のだよりなやのく
りこかくれうそうは乃国の
ぜ田の笠松や箕面乃瀧ほ波も
高麗よだはや舞れ姿のそとは

しら於蓑笠乃雨へゝまわりはや
松嶋や小島乃苫屋まて遊し
身ハそとの濱千鳥音よ角之て
雁くよ里か乃すゝかな参　住事
漁花として川つて夢よ川しろわ
何故電葉しゝなりはかよきハ
とても渡世をいとなまば士農

工商乃家にも生まれず又琴棋
書画をたしなむ身ともならずして
たゞあけてもくれても殺生を
いとなみ遅々たる春の日も
所作たらねば時を失ひ
秋の夜長し夜長しとも
漁火白うして眠る事なし

九夜乃天も曙をまちし玄冬の
あしたも寒うして鹿をこし海
猟師ハ山をこひ見ゆふすまあ
ずの音ーもかなしさも忘
れ乃返る網をさしつる塩の
末の松山風あらき袖に波こし
奥乃石ぶみゑひすさとも涙ちり
あまりことまれも千賀乃塩竈
身哉このひぞくひなもましま
きゝしとやそを聞しくなく風ー
さらぬ様うとうと風ひろさのとうと
とうと小志風うりうとうとは殺生乃
中よ芝さん風ふけるたなうの
なはかはくりはのぎさ乃本末

まだ浅き波乃うゑにも
うけらし年かけ子をうつし
春鳥乃しらぬ歌をめくりはし
じまじと字とりとよりまして字をき
座りのさ咲花は梅かもし我
やはらさうとう歌はそう
まる血のかみさをく降さば
ぬきしもと青簑や笠をかつさき
愛しこふなよわをあとめれ
かくれ笠のくまとつんのまもあろ
さく我を猶もわりし数ち乃源よ
月もく我なみまろかやうろ哉
もみちのりし瀬のさくたり
上ハギリ
染紫まろきうとまやすこと

なゝしもくゞ迄よりてこそ
化生となれ飛人をゝ流立鉄の
りしをなかし羽をたゝよ銅の
丸をとふ立てこそ眼をながむもて
志くむつ代を巻りむ地は連せ
猛火の烟に世を安て籍なせあん
えぬ者なしとわをうなしゝ

新屋しせよ育んとは連地ちち
えぬみ羽ぬれとを乃せくひり
うとうゑの人は名のとなる
為は狼とうなわらわれ傍道也
のさのゝ猪陽のぬゝ地ま定も
おつなし地をりし慢大魔り
きめらまてあらまうし洋字とう

一、一、一、一、一、一、一、一
庵しつかさや山寺ひまなき夢力子
一一、一、一、一、一、一、一二一二
く居しひなざ山老てさへや御
二一二八九一一一、一、一下一二一二一一、一
傍ゑ山くまえや法傭とふ
一一一一、一一、一一、一一八九一
りはくおりへたう粉ふくわ